

官民学の協働による風情ある景観形成手法に関する実践研究 新潟県弥彦村における取組みから

長岡造形大学 および 弥彦観光協会まちづくり部会
代表 澤田 雅浩 (長岡造形大学)

1. はじめに

新潟県弥彦村は、弥彦山の裾野に弥彦神社を有し、弥彦駅からつながる参詣道周辺には湧出する温泉を活用した温泉宿やみやげ物や等が立ち並ぶ県内でも有数の観光地である。しかし近年では、神社への参詣客がそのついでに街並みを散策することも少なくなり、宿泊客も施設の大型化に伴う食事や買物等、従来参詣道に立ち並ぶ店舗が受け入れてきたニーズの囲い込みにより、浴衣姿での散策といった風情のある景観が失われつつある。

このような問題意識から弥彦観光協会まちづくり部会では、長岡造形大学と協働して弥彦神社周辺の景観整備に取り組むとともに、ペットボトルや割り

箸を再利用した手作りちょうちんを活用したナイトウォークの実施や、弥彦ウォークラリーの企画運営などを通して地域の活性化及び景観整備への意識向上を目指して4年前から活動を継続してきた。

本研究ではこれまでの実践活動での成果を踏まえ、訪れる人が楽しめる空間整備を行政・住民そして大学との協働によってより持続的なものにするため、具体的な実践を行うものである。

2. これまでの取り組み

2-1. 協働体制の構築

新潟県巻地域振興局（当時）による「弥彦山麓景観づくりワークショップ検討委員会」により、弥彦温泉周辺が実証実験の対象地となり、そこで県内大

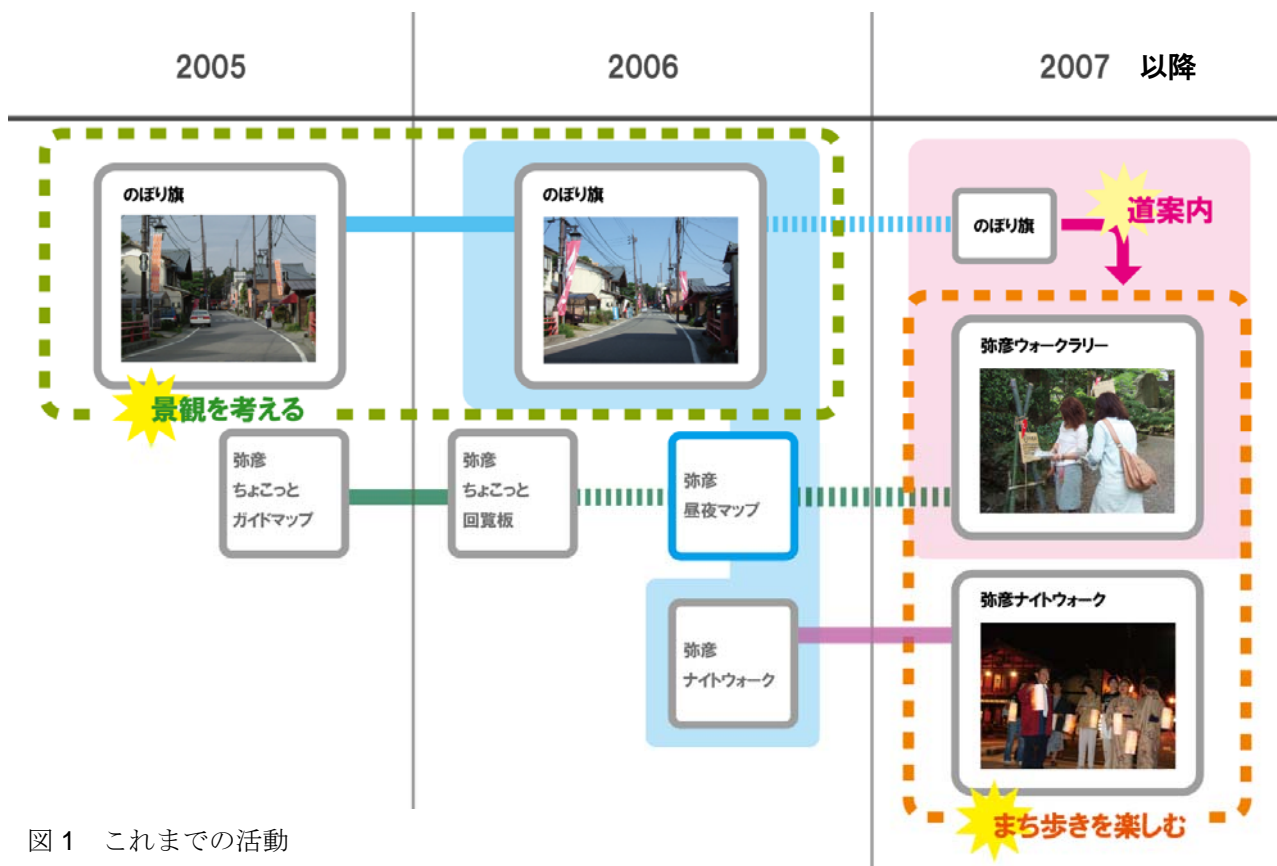


図1 これまでの活動

学の学生との協働による幟の制作と掲揚が行われ、その成果に関するシンポジウム等も開催されてきた。その後、その事業自体は終了したが、弥彦観光協会と長岡造形大学が協働し、活動を発展させていくことになり、協会内のまちづくり部会に学生有志とともに参画する形で活動が継続することとなった。

2-2. 活動方法の変化

当初は幟の作成が主目的であり、協働とはいっても、地域から上がってきた要望に学生有志が一方的にデザインおよび制作を請け負うという形式にとどまっていた。しかしながら翌年以降はまちづくり部会に参画する地域住民（商店主など）が大学のアトリエを訪問して実際に制作にかかわるなど、協働の形がより一体的なものへと変化した。住民と学生が企画立案の段階から協働し、議論を重ねる中で、ナイトウォークの企画やウォークラリーの企画などが生み出されることとなった。

2-3. 活動目的の変化

活動方法の変化に連動して、活動の目的自体も徐々に進化してきた。当初はあくまでも一時的な景観向上を目的として幟の制作と掲揚が目的化していたといえる。それを平成 18 年度には幟の制作そのものもプロセスに組み込むことで、自分たちが手間をかけたものを掲揚し、その制作過程を幟を見ている人に説明するといったコミュニケーションのきっかけとして活用していくことでにぎわい創出につなげていこうという機運が生まれてきた。

さらにそこでの経験を踏まえ、あくまでものぼりは地域を訪れた人、旅館等に宿泊する人の目を楽しませるツールの一つであるという理解のもとに、ウォークラリーやナイトウォークといったアクティビティを組み合わせることで「そぞろ歩き」による風情ある風景を生み出していこうという目的を共有し、活動を推進していくことができるようになったと言える（図 1）。

3. 活動の目的

3-1. 活動主体の拡大

これまでは、観光協会まちづくり部会の会員有志と学生の限られたメンバーが計画作りとイベントの運営全般を担っていた。昨年度はウォークラリー時に地域住民に協力を促し、小さなのぼりを掲揚してもらうなど少しずつではあるがイベントの認知と参画への可能性が萌芽しつつある状況となっていたこともあり、本年度はより積極的な関与を促せるような取り組みを行うこととした。そのツールとしてこ

れまではメンバーで作成していたナイトウォーク用の提灯を自宅で気軽に作れるように「提灯制作キット」を開発、それを近隣住民を対象として各戸配布することを計画した。さらにはまちづくり部会の会員拡充にも取り組むこととした。さらにはこれまで積極的な関与や支援を得られなかった弥彦神社周辺に立地する旅館・ホテルに対しても積極的なアプローチを行い、宿泊客の方々への周知を依頼するとともに、イベント等への気軽な参加を呼び掛けていくことで、きっかけとしてのイベントを企画する側、参加する側、そしてその舞台となる地域が一体となって今後のまちの活性化に取り組めるような状況の生み出しを第一の目的とした。

3-2. これまでの活動総括

先述のように、これまでは地域の事業者の発意により、大学との連携によって活動の大部分が賄われてきていた。特にナイトウォークやウォークラリーはイベントとして徐々に認知をされ、参加者の中には複数回参加してくださる方も見られるようになった。また、舞台となる地域住民の協力も少しずつ得られるケースも出てきた。しかしながらこのような活動が最終的には地域の景観向上を伴うまちづくりへとつながり、風情ある弥彦を実現しながら活性化を図るという活動を志向していることへの認知はほとんどないといえる。そこで、数年来実施してきたこの活動の実績を踏まえ、外苑坂通りに面して立地している町立体育館の郊外移転・建て替え事業に対してその跡地利用に関するアンケートをまちづくり部会として実施を試みることにした。直接的ではないがこのような調査をまちづくり部会で行うことによって、移転後の空間利用に関する意見を集約するだけでなく、活動認知や評価に関しても明らかにしようとするものである。これらの一連の振り返りや調査結果のまとめとその活用によってこれまでの活動を総括し、今後の具体的な活動方針へとつなげていくことをもう一つの目的とした。

4. 今年度の活動

4-1. まちづくり部会を中心とした全体の活動

本年度は活動開始前にいくつかのイベントがすでに予定されていた。特に観光キャンペーンとして非常に集客力のある「デスティネーションキャンペーン（DC）」が2010年10月に新潟県を対象として実施されることが予定されており、そこでの集客および活動の周知は重要であった。それ以外にも弥彦神社や公園周辺で例年通り予定されているイベント等

に合わせる形でナイトウォークやウォークラリーの日程を調整することから部会の活動は始まった。本年度は最終的にまちづくり部会としては13回が開かれ、ナイトウォークのルート選定や提灯づくり、そしてイベント後の振り返りなどを精力的に行ってきた。それ以外にも8月初旬には地区内約250軒の住民に対して提灯制作キットを配布したり、新たに作成した浪漫提灯を宿泊施設に紹介し、注文を受けるなど、まちづくり部会と学生によって部会以外にも多くの活動を積み重ねてきた。

4-2. ナイトウォークの実施

5年前に学生からの提案によって始まったナイトウォークも、当初関与していた学生が卒業に伴って不在となり、それを引き継いだ学生とまちづくり部会によって継続されてきた。しかし当初掲げた最終的な目的である、このイベントによって街並みの風景として神社や温泉を訪れた人々がそぞろ歩く姿を生み出し、その波及効果によって景観づくりを行う体制を構築するという意識が薄れつつあった。

確かにナイトウォークは実施することで単体のイベントとしても「楽しかった」「また企画してほしい」といった意見をもらうことができていることからある程度の効果を持っている。ただし、その実現には多大なマンパワーが投入されていることも事実である。実際に好きな時に人々が街並みを散策する仕掛けとしては、若干運営方法の見直しをする必要が生じていたといえる。

そこで、本年度は「フリーナイトウォーク」の運営を試みた。これまでのように集合場所や時間をあらかじめ決めておき、ボランティアガイドの案内によって決められたルート歩くのではなく、いくつかの情報を頼りに訪れた人がそれぞれの関心や体力に応じてルートを選択して楽しんでもらうという手法を採用することとして事前準備を検討してきた。実際にこれまでは提灯がろうそくの炎で融けだしたり、炎そのものが消えてしまうなどの問題があり、それには同行するスタッフで対応を行ってきた。フリーでの行動を許容することでこれらの問題への対応が迅速にできなくなることから、見どころを示したマップを作成し、そこに提灯の持ち方を明示することである程度の対応をするとともに、モデルルートを設定しそのルート上に「まめカフェ」を設置、休憩及び不具合のある提灯の交換等を行える準備を行い、少なくなったスタッフはそれらの拠点に配置することとした。

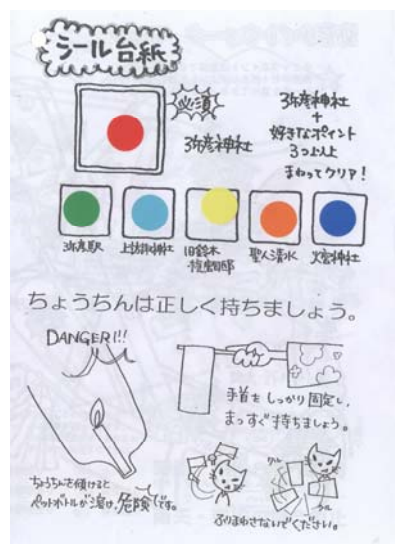


図2 フリーナイトウォークマップ



写真1 ナイトウォーク・まめカフェの様子

ナイトウォークは10回計画されていたが、雨天中止が3回となり、結局7回の実施となり、合計で335組の参加が得られた。弥彦公園で開催されるホテルまつりに合わせた従来型の回が最も人出があり、フリーの回は悪天候の影響もあるが、あまり多くの参加者は得られなかった。しかし8月5日に地域に配布したキットを活用して参加した方もあり、今後の可能性について実感を得ることができた。ただし、効果を期待したDCとの連動に関しては十分な成果を得られなかった。

4-3. 浪漫提灯の制作

ナイトウォークの実施に際してこれまではペットボトルや割り箸の再利用を前提とした簡易型のものを利用してきた。これは環境負荷を抑えたいという意向に加え、材料入手や加工が容易であるため制作の手間をある程度軽減できるという利点があった。一方でろうそくの炎でペットボトルが溶けたり、覆いとする紙が湿気で弱くなってしまい一度利用すると見栄えが悪くなるなどの問題を抱えていた。結果

として宿泊施設への展開を考えると、その点が導入を躊躇させる一因ともなっていた。

そこで本年度は長岡造形大学プロダクトデザイン学科の教員と学生の協力を得ながら、プロダクトとしての質を向上させ、電池とLEDを利用した恒久型の提灯を開発、希望者への配布を行った。事前に試作品を宿泊施設に見てもらい、注文を募った結果旅館組合加盟の17軒で採用された。貸し出しは11月に入ってからであったため、本年度はナイトウォークとの連動は行われなかったが、次年度以降の可能性を見出すことができたといえる。



写真2 作成した浪漫提灯

4-4. ウォークラリーの改善

ウォークラリーに関しても、参加者の滞在時間の延長を目指し、地域内の商店等へも波及効果を生み出すための改善を行った。チェックポイントの見直しを全面的に行っただけでなく、弥彦駅から弥彦神社に至るいくつかの名のついた通りを意識してもらうための吹流しの掲揚とマップへの記載などを行った。さらに参加者への景品として、これまでのナイトウォークで利用したろうそくを再利用し、アロマキャンドルを制作、その経緯を紹介しながら配布することで環境面にも配慮した計画を実施していることを意識づけることができたといえる。

4-5. 住民意識の集約

まちづくり部会の活動は、その拠点を何度か変更してきた。当初は町立体育館を活用していたが、その後駅前の空き店舗を部会開催時や作業時、イベント時に無償で借りることができ、活用を行っていた。しかし事情によって利用ができなくなったため現在また体育館を活用している。その体育館は将来的に

地域外に移転し、この体育館は取り壊されていることが決まっている。町はこの跡地を民間主導の開発にゆだねる意向を示していたが、まちづくりを進めていくうえで重要な場所であることから、まちづくり部会主導で住民から意見を募ることとした。そこでは、ナイトウォークなどの活動を評価し、今後もみんなで協働してまちづくりを行っていく上での拠点として活用すべきだという意見なども得ることができた。そこで活動にも参画している行政とより一層の連携を図るべくその意見を携えて町との意見交換を行った。結果として、町長を交えた形で1回、現場レベルでも1回行われ、必要に応じて連携を取っていくことが合意されるなど、今後に向けた可能性を見出すことができたといえる。



図3 ウォークラリーマップ

5. まとめと今後の課題

今年度は当初目標としてきた活動主体の拡大に関しては一定の効果を得ることができた。運営側の人数は減少したものの、フリーナイトウォークへの移行に伴う効率的な運用のめどが見ついたといえる。また制作キットの配布により地域住民の参加が増えたことは今後の主体的な参加者の獲得および運営への参画の可能性をうかがわせるものである。さらには宿泊施設も浪漫提灯の開発と提供によって今まで以上に好意的に取り組みを評価してくれるようになったといえる。さらには行政との具体的な計画作りへの協働の糸口も見えはじめるなど、マンネリ化を危惧した活動が次のステップへと移行する契機となったといえる。今後もこのきっかけを逃さず、より充実した活動と、普段のまちづくりへの展開へと結びつけていくことが肝要であると考えている。